

アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(4) —1921年から1930年のサルコリ関連の資料を中心に—

A study of Adolfo Sarcoli's Music Activities (4)
—Focusing on Documents Relating to Sarcoli, from 1921 to 1930—

直江 学 美 (人間科学部こども学科准教授)

Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Associate Professor)

〈要旨〉

本研究では、1921(大正10)年から1930(昭和5)年の間に日本で書かれた、アドルフォ・サルコリ(1867-1936)に関連する資料を調査・収集し、報告する。

これら資料から、1921年から1930年に日本で行われたサルコリの音楽活動に関する報告と検証を行う。検証をもとに、最終的にはサルコリが日本の音楽界に与えた影響を考察する。

〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ, 西洋音楽受容, イタリアオペラ

はじめに

筆者はこれまで、アドルフォ・サルコリの音楽活動を調査、報告してきた。サルコリが来日した1911(明治44)年から1912(大正元)年までに行なった音楽活動については「金沢星稜大学『人間科学研究』第10巻第1号」に⁽¹⁾(直江学美 2016.9: 23-30)、1913(大正2)年から1915(大正4)年については同巻第2号に⁽²⁾(直江 2017.3: 31-40)、1916(大正5)年から1920(大正9)年については、同11巻第2号にまとめた⁽³⁾(直江 2018.3: 53-58)。

サルコリが来日した1911年から1912年に日本で書かれたサルコリ関連の資料からは、サルコリが「声楽家」として日本の新聞や雑誌に多く取り上げられ、珍しがられていたこと、また、サルコリが当時の日本音楽界に必要とされ、日本の声楽界に新しい存在として受け入れられていたことを明らかにした⁽¹⁾(直江 2016.9: 23-30)。

1913年から1915年に日本で書かれたサルコリ関連の資料により、この期間にサルコリは「指導者」としての活動が多くなったこと、そしてサルコリの存在が日本に定着したことを指摘した⁽²⁾。1911年から1912年、1913年から1915年のいずれの期間も、非常に多くのサルコリ関連資料が見つかった(直江 2017.3: 31-40)。

1916(大正5)年から1920(大正9)年までの5年間については、サルコリが一般にも広く認識され、またこの時期、サルコリの存在により、日本にそれまでなかった新

しい歌い方がもたらされたことを「サルコリー式なる独唱」との記述の発見により明らかにした⁽³⁾(直江 2018.3: 53-58)。

本研究では、続く1921年から1930年の間に日本で書かれた、サルコリに関連する資料を調査・収集し、報告する。それら資料をもとに、サルコリの音楽活動に関する報告と検証を行う。1921年から1930年はサルコリが54歳から63歳の年にあたる。

なお、表記は出来る限り原文記載のままとし、()は筆者の補筆とする。

1 1921(大正10)年—1923(大正12)年のサルコリ関連記事より

1-1 弟子がイタリアへ

1921年に書かれたサルコリ関連の記事は見つけることができなかった。演奏会の回数や演奏家の演奏回数がまとめられている『音楽年鑑』にも、大正11年版(大正10年の統計)にサルコリが演奏した記録は見られない。

サルコリの名前が見られたのは、1922年2月8日付『東京朝日新聞』の掲載記事である。この記事はサルコリを直接扱ったものではなく、イタリアのナポリに滞在しているマンドリン奏者、田中常彦に関する記事で、次のように書かれていた。「櫻さく春四月末南歐伊太利リボルノ市郊外の大音楽堂でマンドリン系楽器の国際的演奏大競技會が催

される(…)今度殊に興味深いのは現在ナポリ滞在中の音楽研究家田中常彦氏が初めて我國選手として出場するらしい噂である、マンドリニスト武井守正男は『田中君は謙遜家であるが同會審議員カラケの弟子でもあり且あちらに折よく遊學中だからさつと出ると思ふ』と語つた、田中氏は大正五年慶大理科の出身で在学中からマンドリンに興味を持ち卒業後も斯界の名手サルコリ氏に就て學び天才的な才能を發揮した所からサ氏に勧められて伊太利に渡り詩人下位春吉氏の家にてカラケ氏の下で研鑽を続けたもので伊太利の樂界でも却々評判が可いし大會には優勝者表彰の賞牌も出さうだから随分と人氣を呼ぶであらう⁽⁴⁾ (『東京朝日新聞』1922年2月8日)

これは、田中がナポリで開催される国際大競技会に出場する可能性があることを報じた新聞記事である。田中は日本でサルコリにマンドリンの指導を受け、サルコリの勧めでイタリアに渡つたと書かれている。イタリアでは下位春吉の家滞在中という。

下位春吉(1883-1954)に関して、サルコリの弟子である鉄能子も下位を頼り、イタリアに声樂の勉強に行くことが書かれた記事を見つけた。タイトルは「鐵能子嬢が伊太利へ 下位春吉氏を訪ねて聲樂研究に」で、先の田中の記事が掲載された約1か月後にあたる3月14日付『読売新聞』の4面に記載されている。

「麹町區四番町一鐵能子嬢(二〇)は女子音樂學校乙部出身の才嬢で目下澁谷女子音樂團で専ら聲樂研究の傍らイタリ語の練習中ですが嬢は來る五月上旬遠くイタリへ下位春吉氏を訪ね聲樂研究の爲三年の豫定で旅立つ事になりました⁽⁵⁾」(『読売新聞』1922年3月14日)

この頃、田中、鉄、とサルコリの弟子が二人イタリアに渡っていることが分かる。

鉄能子のイタリア行きは、同じ『読売新聞』3月28日付4面に「ザルコリー氏と同伴で近くイタリへ行く聲樂家能子嬢 長い間の希望が叶つて三年の豫定で」とのタイトルで紹介されている。この内容に関しては、翌3月29日付同新聞に『取消』と題された一部訂正記事が掲載された。それぞれ以下に記す。

「聲樂家として蔣來を囑目されてゐる鐵能子さん(二〇)は愈々年來の望みが叶つて伊太利ミラノに留學する事になり廿二日、府廳から旅行免狀が下附された。能子さんは麹町小學の時代から音樂家として受持教師金須女史から愛せられその人の勧めで東京音樂學校乙種に入學したのは大正七年四月であつた、そして同科を卒へてから今の博士婦人矢野すみ子さんに就いて音樂を學び、引續いてザルコリー氏、ミス、バーカーに就て聲樂を稽古したが、その天才は夙に樂界の先輩から認められ殊に昨年三月慶應のグリーン俱樂部(ママ)や大阪同好會での演奏に好評を博した。

(…)目下渡伊の準備に急がしい。伊太利にはザルコリー氏や彫刻家ベツシー氏が同伴である。能子さんの一家は父君信夫氏と母堂こん子さんとの間に能子さんを頭に美枝子(一七)規矩夫(一六)英子(一二)信正(一一)信興(九)石生(七)の七人兄弟が睦しく暮してゐる。母堂は語る『未だ何時發つとも判つて居ませんが御一緒のザルコリーさんが船を極めて下さる筈です。矢野先生には一番長く御厄介になつてゐました。留學の期間は約三年の見積りですが、長い間の志望が叶つたので當人は勿論私たちも深く悦んでゐます』と⁽⁶⁾ (『読売新聞』1922年3月28日)

「◇取消 廿八日の本欄に鐵能子嬢がザルコリー氏と同伴で伊太利に行くとして寫眞説明を掲げたるに對しザルコリー氏から事實無根の旨申し出られたから取消します⁽⁷⁾」(『読売新聞』1922年3月29日)

鉄能子の渡伊については、『音楽界』にもサルコリの名前とともに記事が出ている。「□鉄能子嬢 高折壽美子史の門を出てミス、バーカー氏に師事し、同氏歸國後はザルコリー氏に師事して居る鉄能子嬢は聲樂研究の爲め伊太利に留學する事となり、既に旅行免狀の下附をも得たが、近く渡歐の途につく筈⁽⁸⁾」(『音楽界』1922.4:46)

鉄能子のイタリア行きは3年の予定で、当初サルコリも同伴すると伝えられたが、サルコリの同伴に関しては、サルコリから事實無根との申し出があつたようである。

これらサルコリの名前が見られた1922年上半期の資料から、サルコリがマンドリンを教えた田中常彦と、声樂を教えた鉄能子が相次いでイタリアへ渡つたことが分かつた。いずれも、イタリアに滞在している下位春吉を頼つての渡伊であつた。

この他『月刊楽譜』4月号には「ザルコリー氏の紹介で此程伊國から來朝された四人の名歌手は近く演奏會を催す由⁽⁹⁾」と書かれている(『月刊楽譜』1922.4:29)。「大歌手クリスタリ」を含むこの4名は、3月27日、28日夜に東京の有樂座で音樂會を開き「稀にみる盛會」であつたといふ⁽¹⁰⁾ (『音楽界』1922.5:40)。その後4月16日に神戸の演奏會を最後に、上海、マニラに向けて出發したことが、同じ『音楽界』の別のページに書かれていた(同上1922.6:34)。また、同雑誌6月号には「サルコリー氏(聲樂家)五月下旬伊太利に歸國されると⁽¹¹⁾」との記事が掲載された(同上1922.6:39)。

1-2 サルコリ、久々の演奏

1922年の下半期の資料に、サルコリが演奏する記事を見つけた。最初は、三浦環との演奏会についての記事である。「七月廿四日午後七時神田青年會館三浦環女史ザルコリー氏演奏會 切符一圓、二圓、三圓、五圓 扱所市内各樂器店蓄音器店銀座共益商社⁽¹²⁾」(『読売新聞』1922年7月

21日)

この演奏会に関しては、雑誌『音楽界』に次のように詳しく載っている。「三浦環夫人サルコリー氏獨唱會」「三浦環夫人は七月廿四日午後七時より神田青年會館ニテ獨唱會を催したが聲樂家のサルコリー氏も賛助出演された夜は満堂立錫の地もなく空しく門前から引かえした人も澤山あつた一歌劇お菊夫人(蟬の歌)メサージャー作二子守唄(シューベルト作)三、五月なりき、薔薇よ語れ、パチ、パチヨー(フランケツチ作)四、歌劇「ミニヨン」君よ知るや南の國(トーマ作)五、子守唄(ブラームス作)六、夜の調べ(グノー作)七、歌劇「蝶々夫人」晴れたる日の海路はるかよ(プチニさく)以上三浦環夫人獨唱一、歌劇「フアランチユラ、デル、ウエス」彼女よ吾れを信ぜよの歌(プチニ作)二、歌劇「蝶々夫人」さらば懐しき我家よ(プチニ作)三、歌劇「グラデアボロ」岩にもたれて(オーベル作)以上サルコリー氏獨唱¹³⁾」(『音楽界』1922.9: 27)

この記事から、サルコリが賛助出演した夜は、満堂立錫の余地もないほどの観客で、入場できなかつた人もいるという。サルコリの人気がわかる資料である。

他に1922年にサルコリが演奏を行った記録は、新聞や『音楽年鑑』にも見られる。「サルコリー氏は六日仙臺市に催される演奏會を皮切りに東北、北海道方面に演奏旅行をする¹⁴⁾」(『東京朝日新聞』1922.11.2)「サルコリー等來演樂團には二葉會其他があり音樂家としては岩城寛、亘理貞子、吉井采等が活動して居る。¹⁵⁾」(『音楽年鑑大正12年版』1923.3: 70)

11月の東北、北海道への演奏旅行に関して、地元の『函館毎日新聞』にも演奏会の様子が紹介されている。記事によると、演奏会は「ハース氏一行」の演奏会で、出演者は「天才の評を得た鯖戸英郎、帝都で有名なテナーのサルコリー氏、獨逸育ちのピアニストたるハース氏にメゾソプラノとして亜米利加で鳴らして來たヘンリエッタ、ペレス夫人¹⁶⁾」であるという。記事の最初には「愛嬌者のサルコリー氏」と見出しがつけられ(写真1)、記事も「同國の花形サルコリー氏は太つた身體に無邪氣な眼を輝し南歐の人らしい情熱家で『彼の女我を信ぜよ』でどこから出るかと思はれる甘い聲で聽衆をチャムしアンコールにトスカ、七の一般に知られてる『フラ、デアボロ』にセレナーデの『朝早い』最後の歌劇『リゴレット』等當夜の人氣を一人で背負つたやうな大喝采環さんの様な愛嬌家だ¹⁶⁾」と、サルコリの人気に関する記述で締めくくられている。サルコリが北海道でも人気があったことがわかる(『函館毎日新聞』1922年11月11日)。

『音楽年鑑大正12年版』でもサルコリの記述を追ってみる。「出演者数」には、サルコリが2回の出演を行い、そのうち独唱は2回、合唱(重唱も含まれると考える)1回

であったことが書かれている。また「7月」の欄には「廿四日サルコリーは久々に三浦環と共に獨唱會を青年會館に開く。¹⁷⁾」とある(『音楽年鑑大正12年版』1923.3: 16)。



(写真1)「愛嬌者のサルコリー氏¹⁶⁾」(『函館毎日新聞』より)

これら1922年の資料からは、サルコリがこの年久々に演奏を行ったこと、そしてサルコリの人気が高く、その人気が東京のみならず北海道地方にも広がっていることがみてとれた。

資料調査を進める中で以前と異なるのは、サルコリ自身の記事が減る一方、鉄能子や三浦環など、サルコリの弟子たちの記事の中にサルコリの名前を目にするようになったことである。

また、サルコリの弟子二人が1922年に相次いでイタリアに渡った。この事はサルコリにとっては当然の事であるが、『音楽年鑑大正12年版』を眺めてみると「11年程海外音楽留學生の續出した年はあるまい其重なる人だけを擧げても左の如き多數を數へる事が出来る¹⁸⁾」と、海外へ留学する音楽家(評論家も含む)の名前と行き先が書いてあるが、書かれている10名のうち、鉄を除くと他全員の留学先はドイツで、イタリアへ行ったのは鉄だけである。当時の日本では、音楽家の留学先はドイツが主流でありイタリアへの留学が稀であることがわかる。

続く、1923年のサルコリ関連の資料は現在見つけられていない。なお、1923年9月1日に、関東大震災が起こっている。

2 1924(大正13)年—1926(昭和元)年のサルコリ 関連記事より

2-1 イタリアから戻るサルコリ

1924年に書かれたサルコリ関連の記事は、サルコリの来日に関するもので、いずれも新聞記事であった。サルコリはしばらくイタリアに行っていたようである。それら記事を紹介する。『東京朝日新聞』には9月5日と11月20日に「△ザルコリー氏伊太利に歸國中だが九月下旬に來朝する²⁹⁾」(『東京朝日新聞』1924年9月5日)、「ザルコリー氏來朝す【横濱電話】伊太利の聲樂家ア・ザルコリー氏は十九日未明横濱入港のエムプレスオブ・オーストラリヤ號で來朝した同士は當分東京に滞在し聲樂教授をなす筈だ³⁰⁾」(同上11月20日)と記載があり、『読売新聞』にも「樂團の師ザルコリー氏伊太利から歸る」のタイトルで「我が國へマンドリンを紹介しオペラの樂式を傳へた最初の人であるテノール歌手ザルコリー氏は、十九日早朝エムプレス、オブ、オーストラリヤ號で歸つて來て四谷區傳馬町の自宅に旅装を解いた『震災後、生徒が散りゝになつたのでイタリアへ妹の顔を見に行つたのです。故國ではミラノ、オペラ、コムパニーの活躍は益々盛んである。九月イタリアを立つてスイス、フランスを通つて日本への途についたのですが横濱到着の三日難破した漁師を救ひ旅中に義援金を集めたら六百圓程ありました。私は前通り音樂の教授をするつもりです』と語つてゐた。³¹⁾」とサルコリが船で来日する記事が記載されていた(『読売新聞』1924年11月20日)。

これら来日記事をまとめると、サルコリは関東大震災で弟子が散り散りになったのを機に、妹の顔を見にイタリアに戻った。そして1924年「エムプレス・オブ・オーストラリヤ」号に乗り、11月20日に横濱に到着し、再び自宅で声樂の教授活動を行うという。

2-2 弟子たちの活躍

1925年のサルコリ関連の資料を見ていく。1925年2月20日付『読売新聞』に「ザルコリー氏(聲樂家)四谷仲町二の二八に居を構へ聲樂教授を始せりと³²⁾」との記事が掲載された。1924年11月にイタリアから帰ったサルコリが再び日本で声樂を教えたとの記事である(『読売新聞』1925年2月20日)。

続いて『音楽年鑑大正14年版』の「大正十三年度音楽日記」に「十一月▲十九日ザルコリー來る、三浦環等の師で久しく伊太利に歸省してゐたのである³³⁾」にも、サルコリの帰国の記事が見られる(『音楽年鑑大正14年版』1925.3:5)。この記事には、サルコリが「三浦環等の師」と紹介されている。他にも、この年サルコリの名前が見られるのは、弟子の関屋敏子に関する記事の中である。順に紹介する。

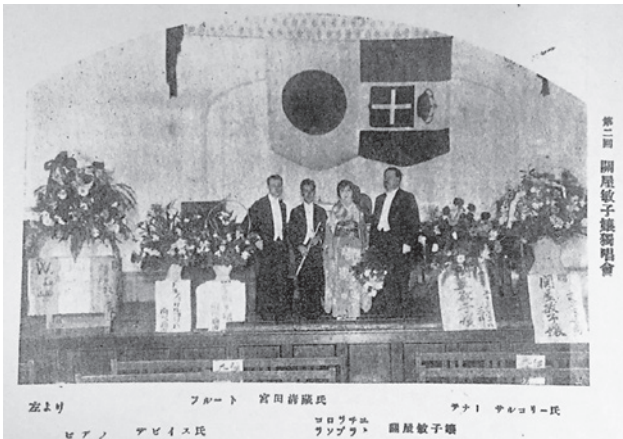
5月25日の『読売新聞』7面に「サルコリイ氏の高弟ですぐれたソプラノ歌手として將來を囑望されてゐる関屋敏子(二二)さんが初めて樂團へ名乗りを上げる」との書き出しで、関屋敏子のコンサート記事が書かれており、その中にサルコリの名前がある。記事の中にも「上野の音樂學校へ入學し一方サルコリイ氏に就て研究してゐたがそれが某外人教授の氣に入らず、ある時の前奏に敏子さんの獨唱に伴奏してゐたその外人教授が故意に曲を弾き違へ他ので憔悴して退校し爾來サルコリイ氏の下に専心勉強して來たのであつた。³⁴⁾」(『読売新聞』1925年5月25日)。記事によると、サルコリの元で勉強していた関屋は東京音樂學校の教授に意地悪をされ、それが原因で退學して再びサルコリの元で勉強することになったという。

10月5日『報知新聞』3面の「関屋嬢の獨唱會」には「先生のサルコリー氏は誇らしげにステージを見ながら、『うまいでせう、外にありません、一番です、外国同じことです』と片言の日本語でしきりと推奨して居りました(…)今度は先生のサルコリー氏が、秘蔵弟子のために賛助出演をして十何年目で歌ふはずです、敏子嬢とのラ・ボエームの二重唱などはききものでせう³⁵⁾」との文章と、関屋敏子とサルコリが写っている写真が掲載されている(写真2)(『報知新聞』1925年10月5日)。



(写真2) サルコリと関屋敏子³⁶⁾(『報知新聞』より)
(上段真ん中に、和服の関屋敏子と蝶ネクタイをしたサルコリの姿が見える)

11月1日発行の『音楽グラフ』には「第二回関屋敏子嬢獨唱會」のタイトルで、関屋敏子の獨唱會のステージ上と思われる、サルコリが写っている写真が掲載されている³⁷⁾(写真3)。「寫眞説明」には「前號豫報の如く十月七日第二回の獨唱會を催した關屋敏子嬢と賛助出演諸氏です、當日嬢の出來榮えに就て師のザルコリー氏は『巧いでせう外にありません』と激賞して居た。³⁸⁾」と書かれている(『音楽グラフ』1925.11:26)。



(写真3)「関屋敏子嬢独唱会」²⁶⁾ (『音楽グラフ』より)

1926年8月18日付『国民新聞』にも同じく関屋敏子の記事に「上野の森を一年で振りすてイタリーの藝術境にあこがれサルコリー氏の薫陶にそのソプラノ歌手としての天才を遺憾なく育ませて去年五月樂壇への華々しい首途をした関屋敏子嬢は、ドイツ全盛の我樂界から異端者視されてみながらも、その真価は確實に認められて、天才聲樂家の名を許されてゐる²⁶⁾」との記事は、5月25日付『読売新聞』²⁴⁾の記事と同じく、関屋が、東京音楽学校を去ったこと、また、ドイツ中心の日本の樂壇から「異端者視」されていることが指摘されている (『国民新聞』1926年8月18日)。

この記事の中にもサルコリの名前が見られる。このようにサルコリの名前が見られる記事は、弟子について書かれたものが多くなっている。なお『音楽年鑑大正16年版』(大正14年9月から15年8月の演奏会日誌と統計)にも、サルコリ自身が歌った記録は見当たらなかった。

1924年から1926年についてまとめる。この時期は、サルコリ来日から約15年経っている。この頃になるとサルコリ自身の記事が減り、サルコリの弟子の記事にサルコリの名前が登場する機会が増えたことがわかる。また関屋敏子に関しては「上野の森を振り捨てイタリーの藝術境にあこがれサルコリー氏の薫陶に (…) ドイツ全盛の我樂界から異端児視され²⁶⁾」との記述がある。この記述によると関屋は東京音楽学校を退学しサルコリの元で学ぶことを決めたこと、そして当時の日本の音楽界はドイツ中心であり、イタリアの歌を学ぶ関屋は「異端者視」されていたことが指摘されている。

3 1927(昭和2)年—1930(昭和5)年のサルコリ 関連記事より

3-1 ドイツ系とイタリア系

前章で述べた、イタリアの歌を学ぶ関屋敏子が当時「異端者視」されていたことは1927年の文献にもみて取れる。安芸太郎著『音楽を志す女性へ』の「関屋敏子嬢」の項目

に「今まで述べました聲樂家の全ては上野出の方でした。ドイツ系の音楽教育をされた人々でした。私はこゝにイタリー音楽教育を受けられた敏子さんの事を書くことに、いゝ意義を認めます。(…) 伊太利人のオペラ歌ひ手ザルコリー氏の門をお叩きになりました。ザルコリー氏は我國に男聲歌曲を引めた功績者の一人でせう。処が此ザルコリー氏は敏子さんの天分の素晴らしさを認められたのでした。そして最も愛するお弟子になさいました。敏子さんも一生懸命になつてお學びになり、ザルコリー氏の藝術を享受なさいました。所がこのザルコリー氏は伊太利音樂のもつ長短を全部揃経て持つてゐられる方なのです。敏子さんが女學校を卒へて上野に入學なさつた時、もう立派なイタリー風の聲樂家になつていらつしやいました。²⁶⁾」(安芸太郎 1927: 108-109)

ここには、安芸がこれまで本の中で記述した多くの声樂家が東京音楽学校の出身で「ドイツ系」の音楽教育を受け、一方関屋は「イタリア系」であるサルコリの元で声樂を学び、東京音楽学校に入学した頃にはすでに、安芸の言葉によると「イタリー風声樂家」になっていたことが書かれている。

続いて安芸は「四面白眼」のタイトルをつけ「所が上野はその時代、偏見と云はれる程ドイツ系の音楽を固守してゐました。それに伊太利音樂と獨乙音樂は丸で兩極端のやうなもので、ドイツ系の人にはイタリーを嫌悪してゐます。敏子さんが教授連や生徒間に白眼視されたと云ふのも眞實のやうな氣もします。かくして彼女は順路たる上野を退學なさいました。そして再びザルコニー(ママ)氏の指導を受けられました。²⁶⁾」と書かれている。安芸は「ドイツ系」であった東京音楽学校はイタリア系を「嫌悪」しており「イタリア系」であった関屋は、教授のみならず生徒間からも白眼視されていたと述べており、そしてこのことが、「イタリア系」である関屋敏子の退学の理由となつたと書いている (安芸太郎: 1927.109-110)。

日本の音楽界が「ドイツ系」であるということは、1930年に音楽評論家堀内敬三が「次第にドイツ音樂の世界的優越が日本にも波及して日本に於ける公式音樂はすべてドイツ型に依るに至つた。現代日本の教育音樂は何か。ドイツ音樂である。演奏會で歌はれ奏せらるゝものは何か。ドイツ音樂である。日本の作曲家は何を作るか。ドイツ音樂である。²⁶⁾」とまで書いている (『月刊楽譜』1930.2: 33-34)。「イタリア系」は「ベル・カント唱法」で声の響きを大切に、「ドイツ系」はリートに代表されるように言葉を大事にすることを鑑みると、音楽の中でも特に「声樂」に関して、「イタリア系」と「ドイツ系」の違いは大きい。

1927年4月発行『月刊楽譜』にサルコリの弟子でテノール歌手の川崎仟が紹介されている。記事を見ると「イタリア系」ということが「ベルカント」や「ヴェルディ、プッチーニ、マスカーニ」といったイタリア系作曲家の名前により強調されているので次に紹介する。「ドラマチックテノール川崎仟氏」と題されたこの記事は「伊太利歌劇や、露西亞歌劇の定期來朝や邦人に依るラジオオペラ等に依つて漸く歌劇愛好時代の訪れて來た我が樂壇にベルカント歌者、川崎仟氏の出現は、今シーズン壁頭を飾る注目すべき事柄である。」との書き出しで始まっている。続いて「氏は五年前より伊太利聲樂家、ザルコリー氏に師事し其の間専心斬道に精進し、伊佛のオペラ歌曲を修得し、殊に、ウエルディ、プッチーニ、マスカーニ、レオンカワ「ルロ等の歌劇中、ドラマチックの領分に適合して居る事は邦人として難得き一人者である」、そして「殊にテノールの主命ともすべき高音に至つては天才的の快聲を持ち、謂ゆるベルカント歌者としての名前を恥かしめないのである。⁽³¹⁾」と、いずれも「イタリア系」であることが強調され、紹介されている（『月刊楽譜』1927.4）。

関屋敏子と東京音楽学校との関係が「イタリア系」と「ドイツ系」と認識されたこともあり、また、この時代「ドイツ系」が主流であるため、川崎について「ベルカント」という言葉が使われ「イタリア系」であることがより強調されているとも考えられる。

3-2 老楽人サルコリ

サルコリの名前が書かれた記事は、1927年6月6日付『東京朝日新聞』7面に掲載されている。これは音楽関係の記事ではなく「明治大正名作展覧会」に関するもので、來場した「諸名士から寄せられた感想⁽³²⁾」の中にサルコリの感想が掲載されている。

同じ10月6日付『東京朝日新聞』に、サルコリの名前と写真が掲載された音楽関係の記事を見つけた。「…老樂人の喜び…秘藏の弟子は世界の舞台へ 本場にその名を誇る貞子さん」のタイトルでサルコリの弟子である喜波貞子について書かれており、文の前半にはサルコリが紹介されている（写真4）。

「四谷仲町のさゝやかな住ひに靜かに余生を送る老樂人アドロフオ・サルコリー氏こそわがオペラ界の恩人である、日本に來たのは明治四十四年、わが國に初めてオペラを紹介するとともに、かれの手で世界の晴れの舞台に名だたるシンガーを次々と送つたのである吾等のテナー藤原義江氏も、田谷力三、原信子も少しの間ながらその教へを受けたが、月謝もとらずにしこんだ最初の秘藏弟子は歐米にその名高き三浦環さん⁽³³⁾」（『東京朝日新聞』1927年10月6日）

1930年11月18日の『上海毎日新聞』に、サルコリの名前



(写真4) 新聞記事「…老樂人の喜び…」⁽³³⁾

と写真が掲載された記事が掲載されている（写真5）。

タイトルは「榛名丸のお土産話サルコリー先生の気焔『三浦環も関屋敏子もこの私が先生です』」でイタリアから榛名丸で帰るサルコリが紹介されている。写真付きの記事で「歐洲歸り榛名丸の土産話＝廿年來東京音楽學校の聲樂教授を務め日本に於ける聲樂の開發者とまで言はれるアサルコリー氏は久しぶりに故國イタリーを訪ひ一年間滞在して更に東京に歸るのであるが、あまり流暢ではないが日本語で廿年も東京にあるので日本の方が故郷のようです。あと三年間を教鞭とるつもりです世界的なアルトの歌ひ手となつたタマキ・ミウラや近頃ではトシコ・セキヤはこの私が先生です。其の外日本での歌ひ手は殆ど私の教へた生徒ばかりです。タマキ・ミウラはいまイタリーのミラノに居ます、こんど會ひました。私はテノールの歌ひ手です。尚ほ『奥さんは?』と聞くと私、昔から獨りです。奥さんはうるさいですと呵々大笑し日本文字刷の名刺を出して住所は東京市四谷區仲町三丁目八番地ですから遊びにいらつしやいと愛嬌を振りまいた⁽³⁴⁾」とある（『上海毎日新聞』1930.11.18）。

なお、サルコリと一緒に写真に写っているのは、洋画家の鶴田五郎（鶴田吾郎：1890-1969）である。『東京文化



(写真5) 新聞記事「榛名丸の土産話」³⁴⁾
(左上の写真の左側に立つ男性がサルコリ)

財研究所』のアーカイブス「鶴田吾郎」によると鶴田は「昭和5年 シベリア経由でヨーロッパ旅行、フィンランド、スウェーデン、ドイツ、フランスなどを約10ヶ月歴遊³⁵⁾したというので、ちょうどこの歴訪からの帰りであろう。なお、このアーカイブスは『日本美術年鑑』に掲載された物故者記事を網羅したものである。(『東京文化財研究所』ホームページ2018.7.19閲覧)

上海新聞記事に書かれたサルコリの言葉によると、あと3年間日本で声楽を教えること、三浦環、関屋敏子の他、日本の歌手のほとんどを教えたことがあるという。また1年間イタリアに滞在していたとの記述からは、1929年末より1930年末にかけてイタリアにいたことがわかる。

続く1930年12月2日付『報知新聞』に「本社主催伊豆地方震災義捐関屋敏子嬢獨唱會は一日午後六時から本社講堂に開かれた、満員の聴衆中には徳富蘇峰翁の一家族や関屋嬢の舊師サルコリー氏等の姿も見え嬢の艶麗な歌ひ振りに魅了された聴衆は終始嵐の如き拍手を以つてこの會を送つた³⁶⁾」との記事と観客の中にいるサルコリが写っている写真が掲載されている(『報知新聞』1930年12月2日)。

4 まとめ

本研究では、1921年から1930年の間に日本で書かれた、サルコリに関連する資料を調査・収集し、その報告と考察

を行なった。サルコリは1923年9月に起こった関東大震災の後と、1930年頃にイタリアに帰っているようである。

この10年間のサルコリの名前は、これまでのようにサルコリ自身に関する記事の中にはなく、サルコリの弟子に関する記事の中に見られるようになっていた。これは、1911年の来日以降、日本で育てた弟子が活躍するようになり、新聞や雑誌に取り上げられるようになったこと、一方のサルコリも50代後半から60代前半を迎え「老楽人」とされ、自身の演奏より、声楽教授者としての活動が多くなったためであろう。

また「イタリア系」ということが語られるようになったのもこの10年である。

1922年にサルコリは二人の弟子をイタリアに送っている。マンドリン奏者の田中常彦とソプラノの鉄能子で、いずれも、下位春吉を頼つての渡伊である。ソプラノの鉄のイタリア留学については、同じ年に留学した音楽関係者10名のうち、鉄以外の9名は全てドイツへ留学していたことから、その頃の日本音楽界では、音楽家のイタリアへの留学は非常に稀であったことがわかる。

このように、日本音楽界の主流が「ドイツ系」であった当時、サルコリが「イタリア系」として対極に位置付けられた記事が見られるようになったのは、1925年頃、関屋敏子がデビューする時期であった。関屋敏子の経歴に関して、関屋の東京音楽学校退学は「ドイツ系」の教授や学生が「イタリア系」の関屋敏子を「異端者視」したことが理由であると複数の資料に書かれていたことを見つけた。

「ドイツ系」が「イタリア系」を「異端者視」したという記述はこれまでは見られなかった。実際、サルコリは、来日した1911年に東京音楽学校で演奏を行なっているし、当時は「ドイツ系」と「イタリア系」が対立するような記事は見られなかった。しかしながら、来日から10年以上の間、サルコリは弟子に「ベル・カント唱法」でイタリアのオペラアリアや歌曲を教え、それら弟子たちがデビューし始めると、これまでの日本音楽界で主流であった官立の「ドイツ系」に対する一つの勢力としての「イタリア系」という独自の存在を示すようになっていった。

このように「イタリア系」が、「ドイツ系」と並ぶ独自の唱法として日本の音楽界に認められたのがこの1921年から1930年の間であり、それはサルコリの日本での音楽活動によりもたらされたものであると言える。

引用文献

- (1) 直江学美 2016「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(1)」『金沢星稜大学人間科学研究』第10巻第1号, 23-30頁。
- (2) 直江学美 2017「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(2)」『金沢星稜大学人間科学研究』第10巻第2号, 31-40頁。
- (3) 直江学美 2018「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(3)」『金沢星稜大学人間科学研究』第11巻第2号, 53-58頁。
- (4) 『東京朝日新聞』1922「南歐の春にマンダリンの技くらべ我が最初の選手在伊中の田中常彦氏か」。2月8日付, 5面。
- (5) 『読売新聞』1922「鐵能子嬢が伊太利へ」3月14日付, 4面。
- (6) 『読売新聞』1922「ザルコリー氏と同伴で近くイタリーへ行く聲樂家能子嬢。3月28日付, 4面。
- (7) 『東京朝日新聞』1922「取消」。3月29日付, 4面。
- (8) 『音楽界』1922「鐵能子嬢」。『音楽界』（音楽教育会）24号, 46頁。
- (9) 『月刊楽譜』1922「響」。『月刊楽譜』4月号, 29頁。
- (10) 『音楽界』1922「伊太利歌手音楽會」。『音楽界』（音楽教育会）247号, 40頁。
- (11) 『音楽界』1922「サルコリー氏」。『音楽界』（音楽教育会）248号, 39頁。
- (12) 『讀賣新聞』1922「下段広告」。7月21日付, 1面。
- (13) 『音楽界』1922「三浦環夫人・サルコリー氏獨唱會」。『音楽界』（音楽教育会）251号, 27頁。
- (14) 『東京朝日新聞』1922「音楽界」。11月2日付, 6面。
- (15) 『音楽年鑑大正12年版』1923「仙台」。大正12年版（共益商社書店）, 70頁。
- (16) 『函館毎日新聞』1922「ハース氏演奏會」。11月11日付, 2面。
- (17) 『音楽年鑑大正12年版』1923「演奏會概観」。『音楽年鑑』大正12年版（共益商社書店）, 16頁。
- (18) 『音楽年鑑大正12年版』1923「海外音楽研究生続出」。『音楽年鑑』大正12年版（共益商社書店）, 18頁。
- (19) 『東京朝日新聞』1924「音楽だより」。9月5日付, 8面。
- (20) 『東京朝日新聞』1924「ザルコリー氏來朝す」。11月20日付, 2面。
- (21) 『讀賣新聞』1924「樂壇の師ザルコリー氏」。11月20日付, 3面。
- (22) 『読売新聞』1925「ザルコリー氏」2月20日付, 5面。
- (23) 『音楽年鑑大正14年版』1925「大正十三年度音楽日記」。『音楽年鑑』大正14年版（共益商社書店）, 5頁。
- (24) 『読売新聞』1925「旧友の思い遣りで晴れの独唱會」。5月25日付, 7面。
- (25) 『報知新聞』1925「関屋嬢の独唱會」。10月5日付3面。
- (26) 『音楽グラフ』1925「写真」。『音楽グラフ』第3巻11号, 12頁。
- (27) 『音楽グラフ』1925「写真説明」。『音楽グラフ』第3巻1号, 26頁。
- (28) 『国民新聞』1926「自ら作曲の俚謠獨唱」。8月18日付, 8面。
- (29) 安芸太郎 1927『音楽を志す女性へ』。108-111頁。
- (30) 堀内敬三 1930「建設の時期到れども」。『月刊楽譜』第19巻第25号, 33-34頁。
- (31) 『月刊楽譜』1927「ドラマチックテノール川崎仟氏」。『月刊楽譜』第16巻第25号, 57頁。
- (32) 『東京朝日新聞』1927「名作展評判期各名士から寄せられた感想」。6月6日付, 7面。
- (33) 『東京朝日新聞』1927「…老樂人の喜び…」。10月6日付, 7面。
- (34) 『上海毎日新聞』1930「榛名丸のお土産サルコリー先生の気焔」。11月18日付。
- (35) 『東京文化財研究所』ホームページ「鶴田吾郎」。2018年7月19日（閲覧）
- (36) 『報知新聞』1930「関屋敏子嬢の独唱會」。12月2日, 2面。